

(海外最新事情)

アメリカ

アメリカの結婚事情

名古屋語学教育研究室 林 姿穂

アメリカは誰もが知る「離婚大国」だ。アメリカの離婚率の統計を見てみると、結婚したカップルのうち、40パーセント以上が離婚している。アメリカでは当事者同士の愛が消えたら結婚生活は終わり、子どもを含め周りへの配慮を日本ほどはしないのではないかとと思われる。2009年度の『世界青年意識調査』によると、アメリカの青年（18歳～24歳）の約25パーセントが「互いに愛情がなくなれば離婚すべきである」と考え、約半数の青年が「子どもの有無にかかわらず、事情によっては離婚もやむをえない」と答えている。結婚そのものが当事者同士のものであり、家族という単位ではなく個を大事にするアメリカらしい統計結果だ。「離婚観」においては、アメリカの青年の72.6パーセントが結婚生活の継続を重視せず、離婚を肯定的にとらえているようだ。

さて、個を大切にすれば、結婚に対してアメリカ人はそもそも否定的で独身生活を謳歌する傾向にあるのではないかと疑問がわく。しかし、意外なことに、同調査の「結婚観について」の項目では、「結婚したほうが良い」、または「結婚すべきだ」と回答した青年がアメリカでは59.7パーセントであり、それは調査対象となった国の中で一位の日本（77.3パーセント）、二位の韓国（73.3パーセント）に次いで三位という結果であった。

結婚する事と離婚する事の両方に肯定的なアメリカ人の再婚率が高いのは当然の事のように思える。日本のように人生に一度きりだからと言って、結婚式に数百万を費やしゲストをもてなすことはアメリカ人にとっては考えにくい事なのかもしれない。勿論、最近日本でも「ジミ婚」という言葉

が一般化されており十分簡素化の一途をたどっている。しかし、アメリカほど日本はまだ簡素化はされていないのは言うまでもない。

ここで、アメリカだけにしかない、世界で一番簡単な結婚式と、一風変わった結婚までの手続きを紹介したいと思う。世界で一番簡単な結婚式ができる式場は、皮肉なことにアメリカ全土でも最も離婚率の高いネバダ州にある。ネバダ州と言えばギャンブルで有名なラスベガスだ。ラスベガス郊外には、至る所に、歴史を全く感じさせない、けばけばしい装飾の教会がある。「キッチュ」という言葉がぴったり当てはまるような教会が通り沿いに点在する。広辞苑を見てみると「キッチュ」とは「まがいのもの、本来の使用目的から外れた使い方をされているもの」という説明がされている。私がラスベガスで見た教会は信者の集会場としての伝統的な教会ではなく、教会まがいのものである。スラム街とまではいかないが、如何にも治安の悪そうな地域に建てられており、人通りも少ない。夜に一人で歩くのはとても怖くて出来ないとするのが私自身の感想である。教会と言っても礼拝堂があるわけではない。車が一台通れるような道が教会の中にあり、マクドナルドのドライブスルーのようにになっている。マクドナルドではレジに店員が待機し、食べ物の受け渡しをするが、こ



の教会では代わりに神父が、常に2, 3人小さな部屋で待機している。そして、24時間いつでも結婚式ができるように車が入ってくるカップルを待機しているのである。予約が必要な教会や24時間営業ではない教会も一部あるようだが、基本的には飛び入りでも神父が応じてくれる。

アメリカでは思い立ったら結婚式は簡単に出来る。日本のように数ヶ月前から計画する必要もない。まずは、教会に向かって車を走らせ、教会が見えてきたら矢印に従って教会のゲートをくぐる。前に車が止まっていれば、それは前のカップルが牧師の前で誓いをしている最中なので、自分の順番が来るまで待っていなければならない。待ち時間は15分ほどで、そう長くはない。即ち結婚式の時間がたったの15分しかなく、それが終われば車で教会を出るといふ仕組みになっている。オープンカーで教会に来るカップルは、車に乗ったまま降りることなく、挙式ができてしまうのである。現地では「ドライブスルー・ウェディング」と呼ばれており、最も低価格で簡単な結婚式を売り物にしている。ポール・ニューマン、ブルース・ウィルス、マイケル・ジョーダンをはじめ多くの有名人が、「ドライブスルー」で挙式をしている。

日本では豪華な結婚式を売りにするブライダル業界や豪華な結婚式こそがステータスだと考える思想もあるが、アメリカでは有名人までもが「ジミ婚」だ。

さて、夜中に教会が開いているのにも理由がある。それは、結婚の書類手続きをする役所がネバダ州では深夜まで開いているからだ。ここでの手続きを済ませないとラスベガスでは結婚式を挙げ

ることはできない。役所の窓口は、平日は朝8時から深夜12時までで、週末は驚いたことに、24時間受付をしてくれる。ここでの申請に必要な書類は特にない。基本的には二人が結婚に同意していることを互いに確認し合う書類にサインするだけだ。更に、日本とアメリカの結婚で大きく異なる点は、血液検査証明書の有無である。アメリカでは基本的にはエイズ予防のための血液検査証明書が結婚するにあたり必要である。しかし、ネバダ州は例外でその書類を提出する必要はない。事務手続きに要する時間は、ほんの15分程度で、それが済んだら教会などで結婚式を挙げるという流れになっている。

教会は至る所にあるので、見つけるのに苦労することはない。宣誓を済ませた後、教会が発行する証書を受け取ったら結婚が成立となる。このような簡素な結婚式なので、家族や友人用の席もなければ、それを見守るための場所も用意されていない。実際に祝福の声をかけてくれるのは通行人だけといった、何とも寂しい結婚式ではあるが、結婚そのものが「当事者同士」のものであることを象徴するようなアメリカらしい結婚手続きと結婚式である。

これを「アメリカらしい」と言えるようになったのはごく最近の事かもしれない。17、18世紀においては結婚の決定は一般的に親がしていたと言われている。家格や経済的要因が重視されていた上、個人的愛情を優先しない家同士の結婚は、当時、共和国の建設と共同体維持のために無くてはならなかったのだろう。資本主義の発展に伴い、19世紀初頭から結婚においては個人の愛情が重要視され始めた。共同体の結びつきが弱まると同時に夫婦関係や家族関係も壊れやすくなり、より私的になってしまったのだろう。宗教色が薄れキッチュな教会で、信者でなくても受け入れてくれるドライブスルー・ウェディングの簡素さを見ると、結婚式はかつてのような一大イベントではなく、娯楽の一種になったのではないかと思えて仕方が無い。



フランス

フランスの学校事情 偏見と現実

法学部 中尾 浩

はじめに

2009年4月から1年間、海外研修の機会を与えていただいた。まずは愛知大学、とりわけ名古屋外国語研究室の同僚の皆さんにお礼を申し上げたい。おかげさまで、病気や事故もなく、無事に1年を過ごすことができた。この1年で得た成果を今後は大学および学生諸君にお返ししていきたいと思っている。

初めての海外長期留学は今をさかのぼること15年前の1995年から1997年であった。もちろんそれ以前に短期で何度かフランスには渡っていたが、半年を超える長期の滞在はその時が初めてであり、最初の留学は我ながら何が何だかさっぱりわからないうちに2年間に過ぎ去ったような印象がある。それに比べると、今回は既に一度経験済みなので何かと余裕が……と言いたいところだが、何度行っても新しい経験に満ちているのが海外生活だ。今回も多くの経験をした。前回の経験を生かしてうまくいったこともあれば、前回の経験があだになって逆にうまくいかなかったこともあれば、今回全く初めてだったので、とまどったこともあった。今回は家族同伴での長期滞在中、子供二人を日本人学校ではなく現地校に通わせた。そこで、フランス、とりわけパリ、もっと正確に言えば私が経験した範囲内の幼稚園および小学校事情について紹介したい。

1) フランスには幼稚園がない？

と書くと驚かれるかもしれないが、日本の幼稚園や保育園に相当する、3～5歳児が通うのも立派な「学校」エコールなのである。フランス語では *école maternelle* (エコール・マテルネル) と呼ばれ、通っている子供たちにそんな自覚があるのかどうかよく分からないが、子供向けの本を読む限り、「ぼく(わたし)、お兄ちゃん(お姉ちゃん)になったよ!」、と誇らしげに思えるほどらしい。

フランスは先進国の中では奇跡の出生率を達成

している。日本のように、厚生労働省が管轄する保育園と文部科学省の幼稚園のような複雑なことは一切ないので、学齢に達すれば基本的に誰でも入学できる。条件はトイレトレーニングができていくことくらいなものだ。トイレトレーニングができていないと、入学を遅らせることもあるらしいが、それほど厳しくは求められていないように思えた。

子育て支援におけるエコール・マテルネルの存在は大きい。あちこちで泣きわめく子供たちをものともせず、先生は子供を受け取ったら「さあ、早く仕事に行け!」と言わんばかりに手を振ってくれる。親は心配だが、相手はプロの先生だ。安心して任せてかまわない。

小学校は *école élémentaire* (エコール・エレマンテル) と呼ばれ、日本と違って5年生までだが、逆に中学校が4年間あるので、義務教育の年数はどちらも9年間で同じである。そして *école primaire* (エコール・プリメール) は初等教育という意味で、マテルネルとエレマンテルを合わせたものを言う。以下、特に断らないかぎり、フランスの学校と書いてあればエコール・プリメール、すなわちマテルネルとエレマンテルの両方を指すことにする。

2) フランスの学校には行事がほとんどない？

日本だと、入学式に始まり、始業式、卒業式、終業式、運動会、学芸会、と行事のない月はないのではないかと思えるほど行事が多く、そのたびに、午前で終わりとか時間割り変更などがあるが、フランスの学校には行事はほとんどない。記憶に残っているのは、幼稚園で謝肉祭最終日 (*Mardi gras*) の仮装ダンスパーティがあったのと(小学校でも小規模なパーティはあったらしいが、わざわざ仮装まではしない)、小学校の最終日(6月最後の日曜日)にみんなで食べ物を持ち寄り、手作りのゲームなどをして楽しむ日があったくらいである。そもそも小学校は親も特別の事情がない限り校内に入れない。フランスでは親が子供を学校まで送り迎えしなければならない。幼稚園は校内に入って、教室で先生に直接預けて、帰るときも教室まで迎えに行く必要がある。小学校は朝は門まで送って行って、そこでお別れ。帰りは門の

前で子供たちが出てくるのを待っている。

それに対して、校外学習は比較的多かった。何しろパリは地下鉄に乗って少し行けば、いくらでも美術館や博物館があり、政府から補助が出ているので、学校は事前に予約さえしておけば、交通費だけで子供たちを色々なところに連れて行ける。さすがに幼稚園はボランティアで付き添いのお願いがあったが、別に行っても行かなくても良い。小学校の場合も、弁当の用意など一切ない。午前中に出かけて給食までに帰ってくるか、給食を食べてから出かけるかのどちらかで、1~2ヶ月に1回くらいはそのような校外学習をしていたようだ。

3) 幼稚園と小学校の給食は同じ？

幼稚園も小学校も始まった初日からいきなり給食(cantine)が始まる。給食センターの都合もあるのだろうが、たとえば私が住んでいたパリの13区で歩いて行ける範囲内の幼稚園と小学校は全て同じ給食内容であった(入り口の掲示板に今週の献立が貼りだしてある)。事実、子供たちの話を聞いていると、長男はソーセージが2本出たと言ひ、次男はソーセージは1本だったと言ひ。中身は同じで量を調整しているらしい。

しかし、そうなると、給食の内容も大変である。エコール・マテルネルに入る権利ができるのが3歳で、中学入学前の小学生は11歳という実に8歳の年齢差の子供を満足させる給食内容となると、小さい子には厳しいものがあるようだ。小学校の前で献立を見ている限りは「ご馳走だなあ」と思うだけだが、幼稚園の前で同じ献立を見ていると、「う~む、幼稚園児にこんなもの食べられるんだろうか」という気がする時もよくあった。どうやら主として小学生向けの献立で、月火木は肉、金曜日はたいてい魚がメインディッシュで、必ず小学生が苦手なような野菜の付け合わせがある。幼稚園児が喜んで食べそうな感じがしない。あまりフランス食に慣れなかった次男は、ヨーグルトなど以外は食べない日が多かったが、他の親に聞くと、似たようなものなので、それほど心配する必要はなかった。フランスの幼稚園児もパスタ、フライドポテト、チキンナゲットといった日本人にも人気の献立が大好きで、そんな日は小さな子

供たちもたくさん食べるそうである。

4) フランスの小学校には体育(音楽、図工)はない？

と私は思い込んでいた。何かの本で読んだか、誰かから聞いたのだと思うが、フランスの学校は勉強をするところであって、勉強に関係のないことはしない、と。しかし、この思い込みは良い意味で裏切られた。エコール・マテルネルにはさすがに教科科目はなく、やっていることは日本の幼稚園とだいたい同じで、図画工作や体操が主である。帰る前にはよく歌の授業があった。エコール・エレマンテールの方は日本と同じくフランス語(国語)や算数といった教科科目の授業がある。ところが、驚いたことに、水泳、体育(いずれも近所のスポーツセンター)、音楽、図工、がちゃんと授業の中に組み込まれていて、水泳と体育はわざわざ専門のインストラクターによる評価までくれる。音楽と図工は学校で歌を歌ったり、楽器を演奏したり、紙で工作をしたりしていた。授業後のオプション授業も充実していて、我が家の長男は週に一度、学校主催の放課後授業で空手を習っていた。他に、バドミントン、卓球などが選べた。

長男は外国人クラス(CLIN)に所属していて、本来の学年のクラス(CE2)にはたまにしか行かなかったのだが、時間割りがフレキシブルと言えれば聞こえはよいが、かなり適当であった。たとえば火曜日の午前中は算数と書いてあるのに、理科の授業(天体の話)があったらしいので、理科に変更になったのかと思っていたら、次の週には英語の授業が入ったり、とにかく子供がもらってきた時間割り通りに授業がおこなわれていない。時間割り通りだったのは皮肉にも、水泳、体操、音楽、図工だけであって、その他の科目はどうやら担任にかなり自由に任されていたようだ。

5) フランスの学校はやたら休みがある？

とにかく休みが多かった。日本の学校も、やれ運動会だ、やれ卒業式だと、何かと行事や短縮授業が多く、これでは落ち着いて勉強できないだろうと思うのだが、フランスは運動会も卒業式もない代わりに、バカンスが多い……。大まかに言って、パリの場合、9月に新学期が始まると10月の

末に万聖節 (Toussaint) のバカンスが2週間、クリスマス (Noël) の休みが12月20日頃から1月5日頃までやはり2週間、冬のバカンス (通称スキー休み) が2月中旬から2週間、春休み (復活祭 (Pâques) 休暇) が4月上旬から2週間と、1ヶ月半通っては2週間休みといった感じである。

しかも、通常も水曜日が休みなので、確かに幼稚園も小学校も普段は午前8時半に始まり、4時半まで通常授業があるので、日本に比べれば長そうに見えるが、全体的に見れば、日本と同じくらいしか勉強していないことになる。フランス国内でも、たとえば2日学校に行っては1日休み、また2日学校に行ったら、今度は週末の休みというのは勉強のリズムが悪いとか、8時半から4時半まででは長すぎて集中力が続かないなど、色々議論はされている。今後、どのように改革がおこなわれるのか……。

6) 働く親の強い味方!

このようにバカンスがやたら多いので、これでは働く親 (とりわけ母親) はたまったものではないと思われるが、そうではない。Centre de loisirs (サントル・ド・ロワジール、以下、サントルと略す) という制度があり、要するに学童保育システムである。これは場所は通常の学校と同じ敷地を用いるが、学校の組織とは全く別で、平日の4時半から6時まで (場合によっては7時まで) と、土日を除いた (場所によっては土曜日も預かる)、バカンス期間中の全日、終日に渡って子供を預かってくれる。活動場所が同じというだけで、学校とはほとんど何の関係もない。学校の校長先生とサントルの責任者も別である。我が家は特にサントルに通わせる必要はなかったが、公園や博物館に行くとバカンス期間中なども、入れ替わり立ち替わり、あちこちのサントルのグループに出会ったものだ。サントルの活動は基本的に芸術、スポーツ、野外活動など、教科科目以外の全般に渡っている。公園では走り回って遊ぶと同時に、植物や昆虫の観察をしている姿などもよく見かけた。

サントルでは平日の4時半から子供を預かるのだが (しかもおやつが出る! 水曜日はもちろん給食が出る)、同じ敷地内で、方やサントルに参加する子供がいれば、他方で学校主催の空手だの

バドミントンだのに励む子供もいれば、補習授業に精を出している子供もいる (無料ではないが、廉価で週1~4回受けられる) という複雑怪奇な状態になっている。月木は補習授業に出て、火金はサントルに出席、などということもありうる。このようなフレキシブルな組織運営は日本では考えられないことであって、確かにこれだけ手厚く子供の面倒を見てくれれば親も安心して子供を産んで働きに出かけられるのだと感心した。

日本がフランスから学ぶことはまだまだたくさん残っている。外国から学ぶことがある以上、我々は外国語を学ぶ意味がある、そう感じた一年だった。